
とある科学の黙示録 アポカリプス

兎に角

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の黙示録 アポカリプス

【Nコード】

N2295V

【作者名】

兎に角

【あらすじ】

学園都市の総合データベース バンク 書庫。

そして、学園都市統括理事長・アレキスター・クロウリーの直通情報網 アンダーライン 滞空回線。

アレキスターと敵対する組織はそれらの交渉権となりうる情報を得るために、とある『少女』を非道な人口開発の手に掛ける。

その血塗られた少女こそ、膨大なデータに脳を使ってアクセスする、絶対機密級の学園都市の暗い闇をも掌る通称 インデックス 黙示録 アポカリプス。

彼女はいわば、科学サイドの禁書目録だった。

少女と暗部が交差する時、学園都市全ての人間を巻き込んだ物語が始まる。

学園都市の最大権力者、統括理事長ことアレイスター「クロウリ」。

科学を象徴する学園都市の長ともなれば、魔術側の人間はもちろ
ん、日本国内、そして学園都市内部にもその存在を良く思わない者
は少なく無い。そういったアレイスターと敵対する人間は互いに集
結し、裏社会に一つの組織を生み出した。

アレイスターと対等に渡り合うために、彼らは交渉権を探し求め
た。

学園都市には『書庫』^{バンク} という総合データベースなるものが存在す
るが、しかし警備員^{アンチスキル}はおろか、学生である風紀委員^{ジャッジメント}すら観覧権限を
持つそのデータベースに交渉権となりうるほどの機密情報が記載さ
れている訳がない。

アレイスターを出し抜くには、それでは足りない。

そこで、組織は『滞空回線』^{アンダーライン} という名のデータベースに目を付ける。

滞空回線 それはアレイスターの情報網を形成している中核だ。
電子顕微鏡を用いねば確認できないほどの、その数値にして70ナ
ノメートルのシリコン塊は学園都市中に5000万機ほど散布され
ている。その特性から、滞空回線^{アンダーライン}には書庫^{バンク}とは比べ物にならない機
密情報が集められていた。それこそ、学園都市を揺るがすことが可
能なレベルの。

こうして、暗部の悲劇がまた一つ繰り返される。

裏社会に名を連ねる『量産能力者計』^{レディオノイズ} 『暗闇の五月計画』^{ベルシックスソフト} 『絶
対能力進化計画』 『暴走能力の法則解析用誘爆実験』と同格の、非
人道で悲惨な計画の末に生み出された最高傑作は『物』ではなく『
人』だった。

ひとたび触れれば二度と日常には戻れない、そんな悪意に塗り固
められた学園都市暗部の何千と何万の極秘情報をも掌^{つかさど}る少女は、い

わば科学が成した禁書目録。
インデックス

人は彼女をこう呼んだ。

アボカリプス
黙示録、と。

第一章 表舞台と舞台裏

right | side | and | wrong | side

第一章 表舞台と舞台裏

ong | side . right | side | and | wr

1

第一〇学区のその一画、研究施設が密集する地帯のビル群から、ズダアアアアーン！と凄まじい衝撃音が聞こえると共に粉塵と黒煙が上がる。

倒壊していく五階建てほどの建物は、公では孤児養育推進最上保育局付属・小児専門能力研究所と呼ばれる施設である。

工事現場の数倍はあるうかという轟音の中、髪と服を衝撃波によって盛大になぶられつつもそれを意に介した様子もなく、一人の女が携帯電話を手に突っ立っていた。

5

「全く余計な手間掛けさせやがって面倒臭せえ、こちとら時給じゃないんだから仕事はさっさと終わらせたいんだけど」

一昔前の怪獣映画のセットのように崩壊していく鉄筋コンクリートの建造物を背に、モデルのような長身の女は気だるげに髪をかき上げる。

秋物のハーフコートにチェス盤のような市松模様のスカーフといった出で立ちの美人だが、その端正な顔は苛立たしげに歪み、パンプスのヒールで辺りの瓦礫を蹴り散らかしていた。

片手で茶色い巻き毛を弄びながら、もう一方の手には携帯が握られ、それは耳元に当てられている。

依然として不機嫌な面持ちのまま、しかし彼女は絶えず口を動か

す。組織内のリーダー格、もしくは司令塔なのだろうか。

「そっちは？ うん、浜面と無事合流？ あっそ、じゃあアシがついたんならそっちで捕獲ヨロシク。あ？ 二手に分かれるのよ二手に。今回の標的は能力者じゃないっばいから滝壺ターゲットが使えるかどうか微妙だけど、ま、適当に頼むわ。電話の女からの指示もじきに入るとしようし。あーあと一応言っておくけど殺すなよ？ 今回の依頼は生きてたまま保護することだからね。こっちは『後始末』が終わったら追うから。じゃあ」

ピツと通話を遮断すると、女は指を鳴らしながら辺りを見回した。立ち込める粉塵の向こうには、崩れて落ちた建材や瓦礫に交じって巨大な培養機や実験器具、精密機器類などが点在している。それら全てを復元不可能ノルマ（バックアップ不能）になるまで一通り破壊すれば、今回の依頼は達成だ。

「さて」

女は面倒くさげにコートの汚れを払うと、歌うように言った。

「手早く済ましちゃおうか」

半壊状態の研究施設に、とどめとばかりにビーム砲が炸裂する。彼女こそが学園都市で七人しかいない超能力者の一人、序列にして第四位の 麦野沈利である。

『アイテム』 それは、裏舞台に生きながら表舞台を支えるために日夜秘密裏に活動している、学園都市の非公式組織の一つである。

主務は学園都市内の不穏分子の抹消、また統括理事会や暗部組織の暴走の抑止なども管轄内であり、アイテム構成員の四人は今日も依頼された任務オシゴトにあたっているわけなのだが。

「結局、生きたまま捕えろっていう命令が一番無粋な訳よ？ そーゆー中途半端な依頼って嫌なのよねえ」

頭にベレー帽を乗せ、制服風の黒地の上着とタータンチェックの赤いスカート、そして金髪碧眼という外国人的風貌をもつこの女子高生は名をフレンダセイヴェルンと言い、アイテムの構成員の一人である。

「そうでしょうか？ 殺さず生かさずなぶ翫なぶっていくって私は超好きですけど。滝壺さんはどうですか？」

際どすぎる丈のワンピース型ニットを着込んだ中学生の少女、こちらは絹旗最愛きぬはたさいあい。茶髪に染めたさらさらの髪をボブカットに切り揃えている、やや大人しそうな印象のアイテム構成員だ。

「うーん……あ、南南東から信号が来てる……」

そして年中無休のピンクジャージが特徴的な脱力系少女、彼女の

名前は滝壺^{たきうす}理后。おかつぱの様な黒髪を垂らし、一点に定まらない視線をゆらゆら彷徨わせている彼女だが、これでもれっきとしたアイテムの構成員だ。

「ったく、なんて物騒な話をしてやがるんだ……」

最後にもう一人。運転席に座って後部座席から聞こえてくるガールズトークに耳を傾けているこの男は浜面^{はまじいしあげ}仕上、着古したスウェットとジャージにピアス、さらにボサボサに伸びた金髪という一山いくらの安いチンピラのような男である。彼は『アイテム』の下部組織に所属する、いわば四人の少女達のパシリなのであった。

そんなアイテム御一行がいるのは、走行中の専用ワゴン車。

組織のリーダーである麦野沈利を欠いた計四名は、^{ターゲット}標的を捕獲するためワゴン車を使って辺りを搜索しているのだ。

と、そこに一本の通信が入り、車内にプルルルルというリングバツクトーンが鳴り響く。

ハンドルを握る浜面からは見えないが、頭部座席の背中に取り付けられているモニターにはいつも通り『SOUND ONLY』の文字が表示されているはずだ。それが上層部からの指令だという相図だから。

『ハイご機嫌いかがかなアイテム諸君！ ちなみにワタクシ電話の女は最悪最低不機嫌度マックスだよー！』

機械を通して変質されたいつもの声が大音量でスピーカーから飛び出し、浜面はその甲高い大声に顔をしかめた。アイテムを担当する電話の女はいつでもハイテンションであり、たとえ最悪最低不機嫌度マックスでもそれは変わらないらしい。

絹旗が「はい、こちら絹旗。超ご用件は？」と適当に返答すると、素性不明の電話の女はスピーカー越しに声を張り上げた。

『あのさあ、さっき下部組織の人員引つ張って来て三〇人くらいにターゲット標的を追わせたんだけど、駄目。全ツ然駄目！ ああもうアイツらときたらやつぱり役立たず！ あの標的ターゲットときたら、何故か監視カメラにも警備ロボットにも人工衛星にも何を調べても映ってないし、とにかく全ての監視経路から逃れて逃走するから追跡のしようが無いの！ まるで学園都市内の全ての構造を熟知している様な逃げっぷり……だつてさ。もうお手上げよー！』

配下の組織が任務遂行に失敗すると直属司令塔である彼女にもそれなりに責任が回って来るのだろうか、ヤケクソ気味に『うだー！』と電話の女は叫ぶ。

対して車内の面々の反応はというと、絹旗とフレンダは互いに顔を見合わせて、絹旗は肩をすくめ、フレンダはため息をついた。ちなみに滝壺は我関せずを貫き無反応で、紅一点ならぬ黒一転の浜面ターゲットは、ほとんど自分がアテにされていない事を自覚しつつも一応標的探しに専念している。

「んで？ 結局、私達はどうすればいい訳？ あと結局今回の標的ターゲットって何なのよ、強力な能力者って訳でもないんでしょ？」

フレンダが尋ねると、スピーカーから帰ってきた答えは『今のところ待機。それ以外なんとも言えないし』というなんとも曖昧な指示だった。

さらに電話の女は続けて、

『っていつかコイツときたら、ちゃんと指令を聞いているの？ 今回の依頼は標的ターゲットについての詮索はNGだつて言っただじゃなか！ 正直

私にも教えられてないくらいだから、まあそれなりに大物なんじゃないの？ とにかく私も色々手を回してみるから、活路が開けるまで待ってて。一応^{おの}麦野にもよろしく言っついてよねー！』

一人でガーッと喋ると、電話の女からの通信は一方的に切れた。

今回はかりは向こうも向こうで切羽詰まっているのかもしれないが、電話の女の自己チューは毎度のことなので、アイテムの面々は特に気に留めず通常どおり流す。

「という訳で、結局みんなどうするよ？ やっぱり曖昧って困るわよね、待機とか言われたって結局こっちは暇を持て余すだけな訳だし」

「……ん、体内から空腹信号が来てる……」

「じゃ、決定ですね。浜面、適当なファミレスを見つけて超入ってください。もうすぐ麦野も戻って来るでしょうし、いつも通りそこで作戦会議です」

「……作戦会議つつたつて、食ってだべって俺がパシられるだけじゃねえか……」

組織内での発言権が無いに等しい下っ端浜面は一人寂しくボソリと呟くと、言われたように現在地から最短距離のレストランをカーナビで検索し、フランス料理系ファミリーストラン『ボン・アペティ』へワゴン車を走らせた。

なんだかんだ言っても、結局従順な浜面なのであった。

「あだツ!? 痛え、イデデデデッ!」

男の情けない声が裏路地に響く。

陽の当たらない路地の奥、そこにはガラの悪い大柄な男が華奢な女子中学生にねじ伏せられているという、なんとも異質な光景が広がっていた。

女子中学生はうつ伏せになった男に馬乗りになりながら、右手で呻く男の頭を地面に押さえつけ、左手で腕をひねりあげている。

「クソツ!! テメエ一体何者……ッ!?」
 「ですからわたくしは風紀委員だジャッジメントと先ほどから申し上げておりますの。いい加減に抵抗はよして下さいな。わたくし、無意味に力を振るうのは好きではありませんので」

馬鹿丁寧な物言いに加え、にっこりと嫌味に微笑む少女。

驚くことに、彼女が着ているのは紛れもなく常盤台中学ブランド 学園都市で五本の指に入ると言われている名門お嬢様校だ の制服である。ラッシュ時の駅内でも見分けがつからしい気品爆発の白いブラウスにサマーセーター、肩に留めてあるのは風紀委員の腕章ジャッジメントの腕章であり、そして灰色のプリーツスカートの中からは細長い金属矢がしまれたホルダーレポートが覗いている。

彼女の能力は『空間移動』。能力で補佐した体術を用いる接近戦、さらに目標地点に金属矢を飛ばしての遠距離攻撃など、変幻自在にオールマイティーな戦闘を得意とする大能力者レベルフォアである。

肩に掛かったツインテールを首を振って払い、『心も体も切り刻

んで再起不能にする最悪の腹黒空間移動能力者』などと噂される恐
怖の風紀委員ジャッジメントは、懐から電子手錠を取り出して言う。

「チェックメイト、ですよ」

彼女こと白井黒子シロイノは、今日も管轄外の手柄を上げた。

「さて、と。管轄外の活動を咎められる前にお暇するとしましようか。レポートの期限が迫っていることですし、今のわたくしに始末書を書く余裕はありませんの」

4

地面に置いていた学生靴の汚れを払って、白井はそそくさと大通りへ向かう。

白井は見た目重視のSF風携帯を取り出すと、その円筒状の小型機械を操作してどこかに電話をかける。人気のない裏路地から下校途中の生徒たちでにぎわう表通りへ抜けたところで、呼び出し音が途絶え、電話が繋がる。

13

『はい白井さん？ こちら明日までに片付けなければならぬ案件やら資料の整理やら活動報告書の作成やらでんやわんやな風紀委員第一一七支部より、時間に追われて超多忙な初春飾利ですよー』

うふふふ、と微妙に声が笑っていない通話相手の初春飾利とは、白井の風紀委員の同僚にして後輩分の柵川中学校在籍生徒である。

白井や初春の所属する第一一七部は、現在期限が近い案件、資料の整理、活動報告書の作成等の事務作業に追われ、初春の近況報告通りてんてこ舞いの大忙しといった状態なのだ。

そんな忙殺な職場に今から向かうと思うと、いくら仕事熱心な白井でもうんざりである。

「ええ、今から向かいますのよ。席を外したのは謝りますけれど、そんな嫌味にならないでくださいな」

『分かつてます。さつき報告が届きましたよ、無能力者集団^{スキルアウト}数人を暴行未遂により身柄を確保……でしたっけ？ 全く、現場の取り締まりに積極的なのはいいですけど、事務をおろそかにされるのは困ります。こっちは本気で切羽詰まってるんですー！』

電話しながら作業を両行しているのか、声と一緒にキーボードを叩くカチャカチャという音が聞こえてくる。

「そうは言っても仕方ありませんの。わたくしたち^{シャッジメント}風紀委員の仕事は治安維持であって、治安を乱す連中がいる限り、わたくしは彼らを外れた道から正す義務がありますので」

『そうはいつでも、白井さんは少し好戦的すぎると思いますよ。一応白井さんも女性^{レディー}なんですから謹んでください』

「し、失礼ですわね。一応とはなんですの一応とは」

互いに軽口を叩き合っていると、電話の向こうの初春が「ああ、」
と思い出したように言った。

『あと現場に向かった^{シャッジメント}風紀委員の方から白井さんに伝言が。「今回の件の始末書を提出するように」、だそつです』

「……、」
『とにかく一刻も早く支部にいらしてください！ こっちはまさしく猫の手も借りたい状況なんですから』

「はいはい分かりましたの、^{レポート}能力フル使用でそちらに急行しますわ……」

言いかけて、白井はふと立ち止まる。

白井が今いる学生がこつた返した表通り、そこに面する細い路地

裏の向こうで見たのだ。黒づくめの連中が無線機で連絡を取りながら走っていくのを。

「……初春。わたくし急用ができましたので、少しばかり遅れることになりそうですわ」

『はい？ ……え、ええつ、えええつ！？』

ちよ、白井さん待つて下さ と未だ喋り続ける携帯電話の通話を切り、ポケットへ小型の機体をしまい込む。

太もものホルダーに差し込まれている金属矢を確認して、薄っぺらい鞆を改めて握り直す。

「全く、ジャケットメント風紀委員も楽じゃありませんわね」

下校途中の生徒達の合間を縫って、白井黒子は『おまへ日常』から『う非日常』へ歩み寄る。

推定される連中の人数は五人程度。しかし無線機を用いていることから他にも複数の仲間がいて、離れた場所から指示を受けている。または送っているのだろう。

一枚の報告書が二枚に増えたところで大差はありませんし、とばかりに白井黒子は苦笑して、

「まあ、遣り甲斐はありますけれど」

白井黒子は『レポート空間移動』を保持するレベルフォー大能力者。

ヒュン、と空気を切る音をひとつ残し、彼女は虚空に姿を消した。そして。

とある白い少年が隠れ家として使っているホテルの一室。部屋の

アクセラレータ 主 アクセラレータ 一方通行は、電話のベルの音で目を覚ました。

アクセラレータ 一方通行はベットからむくりと身を起こすと、あくび混じりにベツト脇に備えてある電話機を一瞥した。受話器は取らなくてもよい。どうせ仕事の合図なのだから。

アクセラレータ 一方通行は目覚めが悪い。

だから、床に散らばっているガラスの破片とその近くに落ちている『何か』を見ても、寝起きの彼は特に何も思わなかった。

そして、その『何か』が窓のガラスをブチ割って室内に突っ込んできたというこの状況に気づくにも、少しばかり時間を要した。

「……………あア？」

眠たげに目ををこすりながら、アクセラレータ 一方通行は窓ガラスが散らばって惨事になっている室内と『ソレ』を凝視する。万が一のために、一応チヨーカーのスイッチに手をかけながら。

一方通行は警戒しながらゆっくり『ソレ』に近づいていく。

一方通行は「おおかた何者かによって危険物かなにかが投げ込まれたんだろう」などと検討をつけていたが、どうやら違うらしい。

寝起きのぼやけた視界がしだいにフォーカスされていき、やっと『ソレ』の正体分かる。

ガラスだらけの床に倒れていたのは 白衣を着た女の子だった。

少女　年の頃は、大人びた小学生か入学したての中学生といった感じだ。その少し色素の抜けた黒髪は平安時代の貴族のように長く、少女の足元まで伸びている。そして、彼女が着ている白衣には「孤児養育推進最上保育局付属・小児専門能力研究所」という文字の羅列がプリントされていて、端の方が黒く焼け焦げていた。

なんて分かりやすい追われ身スタイルだ、と一方通行は嘲るように声無く呟く。

一方通行は振り返り、フレームが歪んで原形をとどめていない窓を睨みつけた。すでに撤退したのか、人影は無い。

「フン、逃げたか」

一方通行はさして気に留めず、踵を返してドアに向かった。先ほど仕事の相図が入ったため、ホテルの角に停車しているであろうキヤンピングカーに向かわなければならない。

白衣の少女は置いていく。

ここまで派手に攻撃されたのだ、どの道このホテルに戻ることはできないだろう。が、少女の運命など一方通行の知った事ではない。これ以上他人に『巻き込まれる』のは御免だし、『巻き込む』のも一方通行の美学に反する。

しかし。

一方通行がチョーカーのスイッチを切り替えて杖を取ったとき、ぴくり、と少女の指先が動いた。

少女はそのまま暫くもぞもぞと指先を蠢かせていたが、やがてぱつちりと目を開いた。むっくり起き上がり、中学生くらいの少女はあたりを見まわす。

「、」
「.....」

アクセラレータ
一方通行と、目があつた。

なぜか一方通行の脳裏に嫌な予感、という言葉が浮かんだ。そして、そういう類の虫の予感というものは不思議と外れないものだ。眉間にしわを寄せて固まる一方通行を不思議そうに眺めた後、少女は口を開く。そんな白衣の少女の第一声はというと、

「はじめまして、ごきげんよう、こんにちは！ お初にお目に掛かります、ご機嫌麗しゅう、今日はお日和もよろしい様で」

ぴし、と一方通行は凍りついた。

「あれ？ えーっともしもし、わたしのはなしきいてる？ うーん なんてだろうへんじがない あれ？ ええと、もしもし。私の話を聞いていますか？ 何故でしょう、返答がありません」

ぴしぴし、とさらに一方通行は凍りつく。

「おかしいなーわたしってもしかしてしんでるの？ しらないあいだにゆーれーになっちゃってたり？ 変ですね、私はもしや既に死んでいるのでしょうか？ 知らぬ間に幽霊になってしまっていたり」

そこで、一方通行のポケットの携帯電話が震えて着信を告げる。おそらく痺れを切らせた『グループ』メンバー、もしくは『電話の男』だろう。

どちらにせよ、と一方通行は携帯を取ろうとしたが

「ねえねえ。あなた、グループしよぞくのアクセラレータだよな？

あなたは、暗部組織グループに所属している一方通行アクセラレータですよ
ね？」

「……………あア？」

グループ所属の一方通行、と。この少女は、今そう言ったのだら
うか？

一方通行アクセラレータは自分の耳を疑った。足を止め、振り返り、得体の知れ
ない少女を改めて凝視する。

「あなたはアクセラレータ。がくえんとし7にんのちようのうりよ
くしゃの1りで、ちからのじょれつはだい1い あなたは一方通
行1タ。学園都市七人の超能力者レベルファイブの一人で、力の序列は第一位……………」
「待て。オマエ一体」

「よかった。そのようすと、しようごうしたけっかはあつてたみ
たいだね 良かった。あなたの様子を見る限り、照合結果は正し
かったようですね」

やっと会話に応じてくれた一方通行アクセラレータを見て、少女は嬉しそうに笑
った。

しかし一方通行アクセラレータの表情は硬い。彼は懐から何かを取り出して、

「オマエ、何者だ。なんで俺の名を知ってる」

低い声で言うと、少女の額に取り出した拳銃を押しつけた。

一般人ならこの時点で叫ぶなり泣き喚くなり、パニックになっ
ているだろう。ところが少女は全く動じたそぶりも見せず、にこやかに
言葉を続ける。とても額に銃口を押しつけられている人間のそれ
とは思えない、穏やかな声で。

「む、しつれいな。がくえんとしのこと、わたしがしらないこと

はないんだから 失礼ですね。学園都市に関する事柄で、私が知得していない事柄など存在しません」

それどころか少女は、可愛らしく頬を膨らませてなにやら憤慨している。

「っていうか！ わたしたち、かいわをはじめてからまだ3ぶん36びょうしかたってないというのに、ひたいにそんなぶっそうなものをおしつけるってどうなの というか、私達が会話をはじめてからまだ三分三十六秒しか経っていないというのに、額部分にそんな物騒な物を押しつけるとはどういうことなのでしょう」

アクセラレータ
一方通行はそんな少女を見て、驚くというより呆れた。こんなに警戒心が無い人間は、あの『クローンを束ねる司令塔の少女』を除いて見たことが無い。

どこかずれた性格、おかしな口調、薄汚れた軽装、そして幼い少女と言う共通点 たしかに言われてみれば、白衣の少女と打ち止ラストオーめはいくつか似ているところがある。

ただし。この謎に包まれた少女は、本来なら機密レベル の情報も知ったら最後、二度と日常世界に戻れないような 暗部の情報を知っていたのだ。

それを踏まえて、アクセラレータ一方通行はもう一度問う。

「もう一度だけ言うが、オマエは誰で、なんで俺の事を知っているんだ？」

「きんそくじこー、またはしゅひぎむです 禁則事項、又は守秘義務です」
「殺すぞ」

ガチャリ、とアクセラレータ一方通行が拳銃の引き金に指をかける。トリガー傍から見

も冗談に聞こえない。

「むう、だれにもいつちゃいけないってきちんときめられてるの。わたしのじょうほうはとつてもきみつなのです。私はその情報について、相手が誰であっても他言してはならないと設定されています。私の情報は極めて機密なのです」

俺だって極めて機密だ、と思いながらアクセラレータ一方通行が呆れていると、再び携帯が鳴った。

アクセラレータ一方通行は拳銃を少女に向けたまま、片手で携帯電話を取り出して耳にあてる。

相手は同じく『グループ』に所属する、つちみかどもとはる土御門元春のようだ。

「いま取り込んで。用件だけ率直に言え」

『あーごめんごめん、愛妻打ち止めとお取り込み中だったかにやー？』

「ぶっ殺すぞ変態」

『まあまあ。変態なのはお互い様ぜよ』

「勝手に一緒にすんな。俺は今何かと忙しいんだ、さっさと要件を告げろよ」

『ああ、本題だ。上からの楽しいお仕事だよ、一方通行。端折って言うぞ。お前の滞在するホテルの付近に白衣を着た少女が逃げ込んだとの情報が入ったんだが、』

「あア？それなら俺の目の前にいるぞ」

『なんだと!?!』

「こつちが訊きてエよ、一体コイツは何なんだア？ ああ、ちなみにコイツ、弾丸と一緒に窓ブチ破って突っ込んできたぞ」

苛立たしげに一方通行が言うと、土御門が間髪いれず返答した。

『保護しろ』

「……………は？」

『一方通行、そいつを保護しろ。それが上からの命令だ』
アクセラレータ

「“捕獲”じゃなくて“保護”、か？」

『ああ。そいつは一応暗部の人間じゃない。いや、扱いとしては人間ですらないかもな』

「どういうことだ？ 暗部の人間じゃねえんなら、こいつは一体なんなんだよ。つーかいいのかよ、コイツ諸々の機密情報を知ってるみてエだが」

『知ってて当然だ。知っていてこそその「アポカリプス黙示録」だからな』

「……………黙示録？ 聞き慣れねえな。コードネームか何かか」

『ああ。俺にも詳しいことは知らされてないんだが……………暗部の機密情報をも完璧に網羅した学園都市のデータベース、そいつはそれにアクセスするためのキーボードだそうだよ。元々非公式組織がアレイスターに対抗するべく作った代物だそうだが、グループ以外の暗部組織がその本拠地を壊滅させる依頼をうけたところ、場に乗じてそいつ黙示録が逃げ出したらしい。はっきり言うとグループの管轄外の仕事だよ。まあ、他の組織の尻拭いってところか。今回の目的は学園都市内に逃げたソレを保護することだったが 思ったより早く終わりそうだな』

電話を耳に当てながら、アクセラレータ一方通行は少女に目をやった。

少女は「わーこれほんもの？」などと呟きながら額に押しつけられた拳銃を眺めている。とてもじゃないが、逃亡中の人間には見えない。

「こいつが、ねえ……………」

「む？ なに？ わたしがなんなの？ 何ですか？ 私が何だと

言うのでしょうか」

白衣少女こと黙示録を無視し、アホカリブス一方通行はふたたび電話の向こうの土御門に言う。

「で、俺はこのアホカリブス黙示録とやらガキをどオすればいい？ 俺は一刻も早く解放されたいんだが」

『今そつちにキャンピングカーを向かわせてる。目立たないところに待機して指示を待つてる』

ぶつ、と通話が切れた。

ため息をついて押しつけていた拳銃をおろすと、アホカリブス一方通行は少女の腕をつかんだ。そのままズリズリ引きずる様にして、出口へと向かう。

「およ？ わたしをどうするきなの、アホカリブスアクセラレータ 私をどうするつもりなのでしょうか、アホカリブス一方通行」

「無駄口は叩くな。俺は一刻も早くオマエを引き渡して自由の身になりてエんだ」

アホカリブス一方通行は取り合わず、ただ歩を進める。対してアホカリブス黙示録は相変わらずマイペースにここにこ微笑みながら、

「あなたいそいでるの？ じつをいうとわたしもいそいでるんだけど」

ただし、その目には感情を窺わせない『濁り何か』があった。

「 ざんねん、もうじかんぎれみたい」

ゴツツツツ！という、凄まじい衝撃音とエンジン音。

一方通行が振り返ると、壁を破壊して突っ込んできた大型トラックが目と鼻の先に迫っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2295v/>

とある科学の黙示録 アポカリプス

2011年8月25日17時26分発行